〔特別寄稿：概要〕

「文化と家族看護」を企画するにあたって

千葉大学看護学部
石垣　和子

人との出会いは，自分とは違う感じ方・考え方・生き方・行動との出会いであると感じることがしばしばある．あの人とは違う文化で育ったと感じたり，似たような文化で育ったと感じたりする．このような感じ方・考え方・生き方・行動というものは，生まれ育った環境，出会った人や本，その他の生きてきた過程におけるさまざまな出会いや気づきから形成されているものであり，その個人の個性とあいまって個別性が高い．しかし，類似性もある．類似性は家族ごとであったり，地域ごとであったり，国ごとであったり，世代ごとであったりする．及ぶ範囲での同じ経験が，大きな意味での共通の感じ方・考え方・生き方・行動を形成するとも思える．厳密な意味での「文化」の定義は他に任せることにし，ここでは日頃から違和感なく見聞きし，行なっているような生活習慣や，それに従っていると安心で気持ちが落ち着き，一体感が持てるという感覚を抱けるような感じ方・考え方・生き方・行動などを「文化」と総称し，家族員一人一人のレベルから国レベルまで，過去から現在までの広い範囲で，家族看護との関係において取り上げる．

看護という仕事はヒトと接する仕事であるから，当然相手のもつ文化を感じ取ることが常につきまとう．出会った上でどのような援助が求められているか知るわけであるが，看護学を修めた者は有りがちなことは，対象の病名や経歴などから当然予想している．しかし，それが外れた場合には，一瞬感じる驚きや戸惑いを脇に押しのけて柔軟性をもって何が望まれているかを捉え直す…はずである．

家族に接するときも然りである．家族員が複数存在する分，個人レベルとの出会いよりも複雑である．家族は家族員それぞれの感じ方・考え方・生き方・行動がある上に，相互の関係性もある．しかも看護者は，疾病や障害や何らかの課題を内包する家族に出会うのである．複雑なだけに，的を得た援助をするには多様な文化への感受性を持ち，広い視野と洞察力をもって当たる必要性がある．その家族のもつ文化と家族員個人の持つ文化との葛藤や束縛などにも気を配る必要性がある．予想と差があるにもかかわらず，一瞬感じる驚きや戸惑いが得られない場合には，看護者自身が気づくことなく的外れな援助を押し付けることになりかねない．この誌の読者の多くは，長年仕事を持ち続けてきたあるいは続けていこうと考えている女性ではないかと推察する．とすると，ある側面では共通の文化を持つ集団であることが考えられる．そういう己の持つ文化をわきまえておくことも必要であろう．

家族について歴史的に振り返ってみると，家族の形成のされ方，家族の中での女性の役割，家族の形態などは，時代によって大変異なっている．もちろん国によっても大きな隔たりがある．大きな枠組でこのようなことを振り返りつつ，日本の現代の家族に対する看護を考えることは意義深いと考えて，4つの論文の著者に期待する次第である．